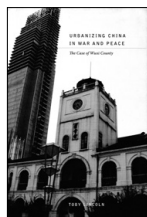


# 都市の発展と「二重構造」支配

本野 英一



Toby Lincoln  
Urbanizing China in  
War and Peace: The  
Case of Wuxi County

16×2.5×23.1cm 268頁  
University of Hawaii Press  
[US \$ 55.00]

私にとって無錫とは、上海に次いで気にかかる存在である。というのも、清末以来経済成長の原動力となっていた輸出産業の発展を担うために、上海に拠点を置く在華外国企業と密接な協力関係を築くことによって、既存の国家体制を根底から掘り崩す勢力の出身地であったからである。古くは、薛福成・薛南冥親子、榮宗敬を筆頭とする榮家一族、そして最近ならあの周永康の名前を挙げれば、読者諸氏もお分かりいただけるように、この街は中国の対外経済関係を考える上で避けて通れない実業家、官僚を数多く輩出している。

こうした上海を拠点とする外国勢力との密接な関係を踏まえた輸出産業によって、無錫の街はいかなる発展を遂げていたのだろうか。本書は、現在イギリスのレスター大学で教鞭をとる新進の中国近現代史研究者が十年以上の歳月をかけ

て行った民国期無錫発展史研究の成果である。著者にとって無錫は、この時代の中国にあって「都市化」とは何か。それはどのような中国に生まれ、管理され、どのような経験を重ね、それらが住民にいかなる影響を及ぼしていたのかを考察する具体例である。

無錫の「都市化」とは何か。それは、社会資本の整備に象徴される進歩と近代を集約した場所となることである。清末民初以来、これを推進していたのは、前述の薛家、榮家に代表される地元有力者であった。彼らは、清朝から日本占領軍、日本傀儡政権と、自分たちを支配する権力者の顔がめまぐるしく変わる時代にあつて如何にして無錫の社会資本整備、維持に腐心したのか。著者は、上は江蘇省政府文書から下は無錫の県庁公報に至る数多くの中国語公文書を丹念に読み抜く

ことによってこの過程を一冊の学術書にまとめた。その内容構成は次の通りである。

## 序 論

### 第一章 「小上海」：無錫の都市化

### 第二章 無錫有力者と社会資本：郷村の都市化

### 第三章 地元有力者と国家：軍閥時代の無錫運営

### 第四章 麋県為市

### 第五章 国民党国家と地方社会資本

### 第六章 結び付く都市：同郷団体、移住、災害救助

### 第七章 生糸：占領下無錫の経済復興

### 第八章 瓦礫の効用：街と郷村の再建

### 第九章 軍事化された環境：日常生活への日本の衝撃

## 結 論

無錫勃興の原動力は太平天国鎮圧後から再建された養蚕製糸業であり、製糸工場の経営、そこに供給する原料繭の買い付け事業で財をなしたのは、周舜卿や上述の薛南冥であった。また、養蚕製糸業に従事する工場労働者が消費する主食を供給する製粉業、米取引、あるいは彼らが着用する衣服を供給する綿工業で財をなしたのが榮宗敬といった地元有力者

であったことは周知の事実であり、今更説明の必要はないだろう。こうした軽工業と商業的農業の発達によって無錫は一九二〇年代から三〇年代にかけて繁栄の絶頂期を迎えた。だが、この経済的繁栄は、数多くの工場労働者を徹底的に管理搾取することで実現していた。本書三三頁には、その一例として申新第三紗廠労働者の起床から就寝に至るまでのスケジュール、生活管理の実態が記されている。労働者一人一人にはベッドと洋服ダンスが支給され、朝食時間は朝五時二〇分、昼食は一一時一〇分、そして夕食は六時二十五分からと定められている。食事時間中も過度の会話や談笑は厳禁、食べた肉の骨を床に食べ散らかすことも禁止。消灯時間後は音を立てることは御法度であった。まるで毛沢東時代を思わせるすさまじい管理統制である。

こうして厳重に管理統制された工場労働者の労力によって得られた富を、無錫の有力者は何に使ったのか。彼らはこれを上下水道設備に代表される社会資本に費やしただけでなく、農村への機械設備（その典型例は開弦弓付近への動力ポンプ）の導入、さらには一九二九年から三六年にかけての電灯の普及といった社会資本整備だけでなく、太湖周辺の自然環境を整備してこれを観光資源として開発することにも費やした。おかげで無錫は、一九三〇年代末期には、その都市環境、景

観が一変したという。これらは全て、地元出身の有力実業家が上海を経由して海外市場と結びついて利益を得られたおかげである（第二章）。

こうして地元出身の有力実業家の努力によって無錫が際立った存在になると、権力者もこれを放っておかなくなる。一九二〇年代の江浙戦争勃発をきっかけに、当時の中国に住民の生命と財産を守る行政機構が上海工部局しか存在していなかったことに気づいた北京政府は一九二一年に市自治法を制定したが、それは一九二七年まで絵に描いた餅にすぎず、無錫自治政府の責任が規定されたのは、一九二八年になってからのことであった。かくして組織されたのが無錫市政準備處で、彼らは乏しい予算、産業化の進展によって規模だけは拡大した無錫の都市環境を整備するために粉骨碎身の努力を強いられることになる。彼らの残した最大の業績は、恵山公園の整備である。これ以外にも、都市拡張計画が具体化してくると、建築許可を求める申請が彼らの許に殺到した。申請者は一日でも早く認可を勝ち取ろうと、賄賂を使い、おかげで土地・建築紛争があちこちで頻発した。無錫市政準備處は、住民、水陸運業者・企業からの徴税、新聞・広告・ポスター・宣伝規制などから得た財政収入だけを頼りに都市の美観を整え、公衆衛生を改善するために大変な努力を重ねた（第三章、

#### 第四章）。

しかし、地元有力者主導による都市環境の整備は、一九三〇年二月二〇日の県政府行政委員会の誕生によって終焉を迎えた。ここから日中戦争までは、第一区政局が都市化事業を推進した。彼らは、社会資本の整備、公衆衛生の改善、住民と土地の登記、警察機構の整備、さらに産業促進と同時に、目前に迫った日本との戦争に備えた灯火管制体制の整備、飲料水の確保体制も万全にしていた。彼らが手本としていたのは、イングランドの社会資本整備事業で、これは国民党が立案した計画を地方政府が実行するという体制となつて実現した。この体制で実現したのが道路開発事業、一九三一年の洪水被害実態調査、ドイツ企業との合辦事業による電力普及事業である（第五章）。

しかし全ての都市整備事業が政府官僚の力だけでできたわけではない。一九三一年の洪水ならびに第一次上海事変以降の被災者救済への財源は、南京、蘇州、上海に暮らす無錫出身の実業家や同郷団体からの寄付に依存しないわけにはいかなかった（第六章）。つまり、官僚主導とは言っても、一九三〇年以來の無錫の都市行政とは結局、政府官僚と地元有力者による二重統治であることに変わりはないのである。

この構造は、国民党政府官僚に代わって日本軍占領統治下

でも変わらなかった。まず基幹産業である養蚕製糸業は、日本企業との合辦という形をとって復旧がなされた。会社経営は日本人、工場管理と原料繭調達中国人という二重経営構造をとったものの、日中戦争の激化、日米開戦によって養蚕製糸業が不景気になればなるほど、経営の実権を中国側が担う割合が増していったという（第七章）。

一方、都市行政は、孫文の思想に共鳴する汪兆銘傀儡政権の下でも進展していた。尤も、傀儡政権の都市行政に協力することは、暗殺の危険を覚悟の上でなければできないことではなく、事実楊寿桐のような犠牲者も出ていた。それでも、一九三八年から翌年にかけて復興は進み、人口増加に伴って住宅需要も増加したという（第八章）。こうして見てみると、傀儡政権統治下の無錫住民生活に何の変化もなかったように見えるが、言うまでもなく実態はそうではなかった。楊寿桐暗殺後、傀儡政権は新四軍対象の清鄉作戰を実施し、それに伴って住民移動、物流制限が実施されたため、住民は日常物資の不足、消費物価高騰に苦しむことになっていったからである（第九章）。

以上が、本書のあらましである。著者の関心は、清末以来の都市環境整備の発展度を跡づけることにあり、本書全体を通じて具体的に明らかにされた社会資本の整備のみならず第

二章で取り上げられた太湖周辺地域の観光資源化などは、従来の中国都市発達史研究では見られなかった新局面であり、非常に興味深い。その反面、社会資本整備、都市環境改善の財源をもたらししていたはずの養蚕製糸業や関連産業を経営していた地元有力者の活動、彼らが上海の在外外国企業とどのような関係を持っていたのか。あるいは彼らが無錫の発展のために、軍閥官僚から汪兆銘傀儡政権や日本軍占領当局に至る歴代権力者との友好関係を維持するために如何に腐心していたのかが全く取り上げられていなかったことに肩すかしを食らった印象は否めない。清朝から日本軍占領当局に至るまでの歴代権力者と地元有力者が組織する地方行政組織との関係は、そのまま王朝時代研究以来の伝統である国家権力と地方有力者が組織する中間団体との関係の対象となる。民国期の上海だと、両者の関係は西洋の研究者の関心を引き（例えば Marie-Claire Bergère translated by Janet Lloyd, *Shanghai: China's Gateway to Modernity*, Stanford University Press, 2009, pp. 221-4）盛んに論じられている研究主題であるにもかかわらず、本書はこの問題に驚くほど無関心である。

そしてこのことは、歴代権力者にいかにも取り入って、自己の生命と財産、名声を保つかに腐心する地元実力者の行動に、著者がまるで関心を示していないことにも通じる。評

者のような研究をしている人間にとって、無錫の有力実業家は実に興味深い人間集団である。なぜなら彼らほど、時代の流れを巧みに乗り切り、体制変動をうまく泳ぎ切った人間集団は他にいないからである。栄家のように、共産党体制にありながらもその実力を温存し、「中国のロツクフェラー」とまで言われるほど高い政治力を持った人間がなぜこの街から生まれるのか。この点について著者の見解が述べられていないのが残念である。そして最後に、「都市化」の進展を可能にした地方財政機構にも言及して欲しかった。

(もとの・えいいち 早稲田大学)

## INFORMATION

### 『三田文学』第一三二号 冬季号

特集 破局から：

評論 加藤典洋 一八六八年と一九四五年

——福沢諭吉の「四年間の沈黙」

小説 荻野アンナ 虹の行方

詩 E. B. A. R 詩 喪の限界へ、わた詩は浮遊する

インタビュ 玄侑宗久 「聞き手」 関根謙

破局が生んだゆらぎ——玄侑宗久『竹林精舍』

評論 郷原佳以 指呼詞を折り襲ねる——『怪物君』の歩行

福島泰樹 ホロコーストの歌——「記憶の物証」をめぐる

鎌田東二 グリーフとウツつく心という魔法の杖

松田正隆 破局を上演する——マレビトの会の活動から

石見舟 「仕損じる」演技術——演劇が破局に呼応するために

菊池信太郎 物言えぬ子どもに寄りそう

——福島の子どもを日本一気云に！

竹原陽子 原民喜の死——原爆以後を生きる

海老原豊 「あの戦争」と「この戦争」と

——こうの史代『この世界の片隅に』

糸川麻里生 渡良瀬に立つファウスト——正造、諭吉、漱石

対談 余華×飯塚容

嵐、その後——中国現代小説の直面する状況をめぐって

「A5判、三田文学会、本体九〇七円＋税」\*東方書店にて取扱いい中

